

「まことに、この人は神の子」 —マタイによる福音書講解説教 110—

詩篇 第22篇 1節～3節  
マタイによる福音書 第27章 45節～66節

説教 岡村 恒 牧師

「まことに、この人は神の子であった」。主イエスが十字架の上で息を引き取られた時、その足元に立っていたローマの百卒長が告白した言葉です。昼の12時から3時まで空は暗くなり、主イエスはこの闇の中で苦しみ抜かれました。そして、大声で叫ばれました。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」。「絶望の叫び」でした。これが十字架です。

聖餐礼典のたびに、「主がこられる時に至るまで、主の死を告げ知らせるのである」(コリント人への第一の手紙第11章23節～26節)という御言葉を耳にします。キリスト教会とは、愛を教える集団ではなく、主イエスの死を宣べ伝える者の集まりです。主イエスの確かな死の事実は、いったい何のために起こったのか。聖書はこの一点に目を向けさせます。『洗礼を受けるとは、キリストと一緒に死ぬことです。そして、復活された主イエスと一緒に新しく生き始めることです。』と教えている通りです。

主イエスが最後の息を引き取られた時、「神殿の幕が上から下まで真二つに裂け」ました。神殿の幕とは、神と人間との間に立ちただかる隔ての幕です。その幕が裂け、隔てる力が失われました。聖書はさらに、「また地震があり、岩が裂け、また墓が開け、眠っている多くの聖徒たちの死体が生き返った。…」(51節)と記しています。これは世の終わりの『終末』の情景です。主イエスが死なれた時、聖書が語ってきた『終末』が訪れた、と言うのです。

この主イエスの死の傍らに、二人の人物が登場します。ローマの百卒長は、ナザレのイエスという人物の処刑を直接指揮し、その死への道筋を始めから終わりまで目撃したのです。この百卒長の口から、「まことに、この人は神の子であった」という言葉が出ました。

さらに、アリマタヤのヨセフが、主イエスの埋葬を願い出ました。主イエスの葬りというのは、この日のユダヤ人なら決して関わりたくない、神に見捨てられた罪人の葬りのことです。弟子たちが絶望して逃げ出したあと、それでもまだ神の国の希望を捨てず、絶望しない人物が、残されていました。この埋葬は、『望みの心を秘めた行為だ』とある説教者は語っています。百卒長が口で言い表した信仰を、ヨセフはその行動で表してみせたのです。

この日、世界を包み込んだ闇は、〈神無き世界

の闇〉でした。しかし神はこの闇の中でさえ、二人の人を神の国の希望に引き入れてしまうのです。神が救いであることをその魂に刻みつけ、決して人間の口から出ないような信仰の言葉を告白させ、具体的な行動にまで導いて下さる。これが救いです。私たちが信仰を告白して歩むというのは、ただ神の深い憐れみによって実現する奇跡のできごとなのです。

本来赦されることのあり得ない罪人である私たちは、洗礼において死んで葬られます。主イエスの死によって、私たちの罪の赦しが実現しました。そして、この信仰を告白して洗礼を受ける者は、確かに、十字架の上で死んで下さった主イエスの死と重ね合わされるのです。

あの日、主イエスは私たちの為に、私たちに代わって罪人の死を引き受けて下さいました。主イエスの死は、確かな死でした。死刑を執行したローマ兵たちが、目撃者たちが、その死を見て証言しています。ガリラヤから従って来た何人もの女性たちが、その死を最後まで目撃し、証言をしています。

主イエスの真実の死、この一点に私たちの救いがかかっています。私たちの罪は、神のひとり子の血以外のものによっては、決して洗い清められることのあり得ない罪だからです。主の死の出来事においてこそ、神の愛が私たちに向かって注ぎ出されています。奴隷を自由にする《あがない(代価)》として、主イエスの命が支払われたのです。

私たちは、主イエスが私たちのために死んで下さったことを感謝するために、日曜日ごとに集まっています。さらに、神様が主イエスを死人の中から引き上げて下さり、死がもはや私たちを支配しないことを明らかにして下さったことを喜び、日曜日の朝、主を賛美しています。

世の終わりの日、主にあがわれた者が、その名前を呼ばれて死の眠りから目覚め、主の前に立つ日が来ます。その日、私たちが神の国の食卓につくことができるために、主は確かにあの日死んで下さったのです。主の死に、私たちの救いが、解放が、私たちの希望の一切がかかっています。それゆえ、今日も私たちはこの口で、主イエス・キリストへの信仰を告白します。「このかたは、まことに神の人であった」。主イエス、神のひとり子、救い主を賛美いたします。

(記 岡村 恒)